

■ 葉いもち防除の徹底を

今年は冷夏が予想されています。いもち病防除の徹底を改めてお願いします。
☆いもち病は一旦発生すると広範囲に感染を及ぼします。余り苗のほ場への放置はいもち病の発生源となりますので、補植が終わったら直ちに撤去しましょう。

◎葉いもち予防のため箱処理剤施用や側条施用を行っていない場合は、オリゼメート粒剤を必ず散布しましょう。
箱処理剤を施用した場合は散布の必要はありません。

①オリゼメート粒剤は6月15日頃(12~18日)の散布が目安です。
散布量：2kg/10a

…もしほ場内でもいもち病発生を見つけたら

持ち込み病斑やほ場の余り苗などからの伝染を早期に発見した場合は、予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤)の茎葉散布を行います。また、営農センターへもご相談ください。



■ イネアオムシ(フタオビコヤガ)の防除

ここ数年、イネアオムシ(フタオビコヤガ)の発生が多く、多くの生産者の悩みの種となってきました。

今年の発生量はやや多いと予想されます、発生が多い場合は、イネの葉が食害され生育の遅れや登熟不良などを引き起こします。前年多発した圃場ではフェルテラ箱粒剤またはルーチンアドスピノ箱粒剤で防除してください。



イネアオムシの成虫

◎イネアオムシの発生時期

第一世代 5月下旬~6月上旬
第二世代 7月上旬
第三世代 8月上旬

◎茎葉散布剤

薬剤名	希釈倍率・散布量(10a)
トレボン粉剤DL	3kg

■ 天候にあわせた栽培管理を

「東北地方1ヶ月予報」 平成26年5月15日 仙台管区气象台発表

〈向こう1ヶ月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)〉

項目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
【気温】東北日本海側	50	30	20
【降水量】東北地方	40	40	20
【日照時間】東北日本海側	30	40	30

凡例： 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

〈気温経過の各階級の確率(%)〉

週目	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
1週目：東北日本海側	40	40	20
2週目：東北地方	50	40	10
3~4週目：東北地方	30	40	30

凡例： 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

〈予報の対象期間〉

1ヶ月：5月17日(土)~6月16日(月)
1週目：5月17日(土)~5月23日(金)
2週目：5月24日(土)~5月30日(金)
3~4週目：5月31日(土)~6月13日(金)

天候、病害虫に負けない稲づくりを励行しましょう!



大事に育てた苗を暖かい日に移植しましょう

~ 適切な水管理で稲の生育をコントロール ~

■ 暖かい日の田植えで活着促進

今春は昨年と比べて温暖な日が続きました。しかし、今後の気温は平年よりも低いと予想されています。

田植えは日平均気温が稚苗で13℃以上、中苗で14℃以上の日を狙って行います。出来れば最高気温が20℃以上であれば、活着はさらに促進されます。田植え後は、湛水し保温効果により活着を素早く済ませましょう。※ウラ面に向こう一ヶ月の気象予報を掲載しております。

1) 栽植密度

○慣行栽培で安定収量を狙う茎数…70株/坪

安定的に収量を得るためには、栽植密度70株/坪がオススメです。

株数を多く植え付けることで、天候に左右されにくくなり、安定的に生育・収量を確保できます。

○「米の精」を投入したほ場の茎数…50株/坪

「米の精」栽培は、土壌を肥沃にし、土壌中の微生物を活性化させることで、アミノ酸等のうま味成分をコメに蓄積させ良食味米をつくる栽培技術です。うま味成分をより多く蓄積させ、お米一粒を大粒にするため、肥料の特性にあわせ栽植密度を50株/坪としましょう。

2) 植え付け深さ

植え付けが深すぎると「分けつ不足」を招きます。深さの目安は稚苗で2.0cm、中苗で2.5cm程度とします。3.0cm以上の深植えでは、分けつの発生が遅れ、茎数不足になりますので注意します。

3) 箱粒剤散布のポイント

箱粒剤は軟弱徒長苗やムレ苗、老化苗に散布すると薬害を生じる恐れがあるので、注意してください。使用時は、育苗箱の上から均一に散布し、葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水してから、田植機にかけて移植してください。

※使用する剤によって散布時期が異なりますので事前によく確認して使用してください。

4) 側条施肥のポイント

側条施肥は肥料によって比重が若干違うため、施肥機の開度を調整する必要があります。使用する肥料の比重を確認し、目的の投入量になるよう事前によく点検を行います。

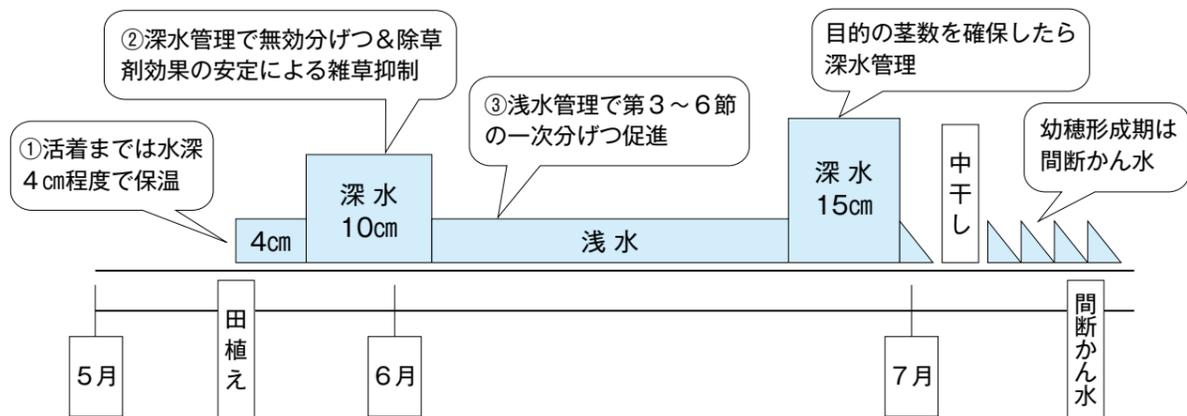
◎主な肥料の比重

JA秋田おぼこ専用銘柄	
おぼこロマン1号…0.84~0.86	有機入りセラコートR484…0.85
おぼこロマン2号…0.80~0.82	有機入りハイチッソ24号…0.86~0.88
おぼこロマンロング1号…0.88	有機入りハイセラ25…0.85
おぼこロマンロング2号…0.85	おぼこ専用14-14-14…0.86
基肥エース…0.80	おぼこロマンペースト…1.34

蓄積型水稲の水管理

※蓄積型水稲とは、有効茎歩合の高い稲づくりのことを言います。

穂にならない無効茎の発生を抑え、茎が太い有効茎を主体に穂数を確保する技術です。



- ①田植え直後は活着するまで水深4cm程度とし、保温効果をもつためできるだけ湛水状態を保ちます。
- ②活着後、無効分げつの発生をおさえるため、深水管理(10cm程度)を5葉齢ころまで行います。
- ③その後、分げつを促進させるため、浅水管理を行います。

除草剤を田植同時散布または田植直後に散布する場合は、深水状態を7日間程度保ちます(フロアブル、ジャンボ、豆つぶ剤では水深を5~7cm以上とします)。

除草剤を散布するときに藻類(カナ)や表層剥離が多いときは除草剤の効き目が極端に低下しますので、水の入替えやカナを除去する効果のある“モゲトン”を使用します。(次ページ参照)

☆斑点米カメムシ対策まで見据えた除草管理の徹底を!!☆

○除草剤使用のポイント ~表層剥離対策、中・後期剤体系例~

雑草処理の目的	除草剤名	使用時期	10a使用量	使用方法
藻類(カナ)、表層剥離を抑えたい!	モゲトン粒剤	藻類・表層剥離の発生時 但し収穫45日前まで	1~2kg	湛水散布

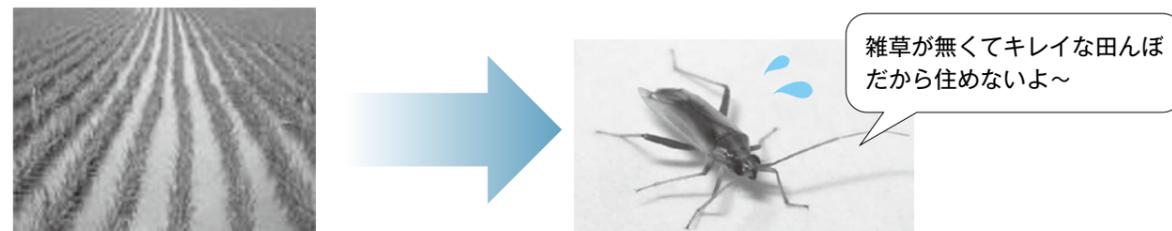
初中期一発剤散布後雑草が残ったら…

ヒエが残ってしまった!	クリンチャー1* ₀ 粒剤	移植後7日~ノビエ4葉期まで。但し、収穫30日前まで	1kg	湛水散布
	ヒエクリーン1* ₀ 粒剤	移植後25日~ノビエ5葉期まで。但し、収穫30日前まで	1.5kg	
	マメットSM1* ₀ 粒剤	移植後15日~20日(ノビエ3.5葉期まで)	1kg	湛水散布
	ハイカット1* ₀ 粒剤 ※クログワイ・シズイに効果高い	移植後15日~ノビエ3.5葉期まで。但し、収穫60日前まで	1kg	湛水散布
	フォローアップ1* ₀ 粒剤	移植後20日~ノビエ5葉期まで。但し、収穫60日前まで	1kg	湛水散布

※散布にあたっては農薬のラベルをよく読んで使用しましょう。

○ほ場内に雑草が残ると斑点米カメムシを呼び寄せます!

雑草を効果的に処理することでカメムシの飛来を減らし、斑点米の発生を少なくします!



水管理番の縮小図

食味向上対策 水管理番

JA秋のぞびの

- ▲深水管理15cm▲
8.5~10.5葉期(稚苗7.5~9.5葉)
- 1次分げつの第7葉(稚苗は第6葉)分げつと2次分げつを抑制し無効茎を出さない。
- 胎動薬と地方薬を十分に吸収させる。
- 1次分げつの3~6葉(稚苗は2~5葉)分げつの充実を図る。

- ▲深水管理10cm▲
中苗田植え後
- 1次分げつの第2葉分げつを抑制する。
- ▲深水管理7cm▲
稚苗田植え後
- 1次分げつの第1葉分げつを抑制する。
- 稚苗・中苗田植え後共通項目
- 高温・強風に対応する。
- 除草剤の効果を発揮させる。

食味向上対策

①分げつを抑制する水管理
有効茎歩合の高い稲づくり

1次分げつの第3~6葉分げつを促進

低温・強風による白穂れ回避と1次分げつの第2葉分げつを抑制

5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月

田植え(5月下旬) | 深水15cm | 浅水 | 深水10cm | 浅水 | 深水7cm | 浅水 | 中干し | 間断かん水 | 落水

②高品質・良食の稲米生産の水管理

中干し | 間断かん水 | 落水

付録 点線に沿ってハサミ等で切り抜いてお使い下さい。

キリトリ線

知って得する稲づくり 付録“水管理番”を活用しましょう!!

JA秋田おばこで全戸配付いたしました「知って得する稲づくり実践編」の付録にある“水管理番”を活用し、田んぼの水がどの程度入っているのか、どのくらい浸透するのか把握して、有効茎歩合の高い稲づくりを励行しましょう!!

- ①“水管理番”は単体では自立しませんので、使用する場合は、中に割り箸等の棒状のものや、木片を挟むようにして使用してください。
- ②数に限りはありますが、JA秋田おばこの各営農センターに“水管理番”の在庫がありますので、ご使用の場合はお気軽にお問い合わせください。

冷害対策の確認を ~今年は冷夏が予想されています~

1. 天気予報をこまめにチェック

冷害には「やませ」により不稔が発生する「障害型」と低温や日照不足で生育が遅れる「遅延型」の2種類のタイプがあります。天気予報をチェックし気温が低くなると予想される場合、生育初期は保温のため昼間止め水とし、用水と水温の較差が最も小さくなる早朝に入水することが有効です。止め水することで昼間の日射を水温、地温上昇に利用しましょう。

2. 中干しは早めに

幼穂形成期以降は低温の影響を直接受けるので、7月初旬には中干しを終了させ田んぼにかん水できるようにします。

3. 深水管理で幼穂を保護しましょう

出穂の22~25日前から幼穂の形成は始まります、それ以降に日平均気温20℃以下の低温や最低気温が17℃以下が予想される場合は、水深10cm以上の深水で幼穂の保護を図りましょう。

また、減数分裂期(出穂10日前頃)に低温が予想される場合は水深15cm以上の深水にします。

4. いもち病に要注意

冷害の年はいもち病の発生が多くなる傾向にあります。苗いもち防除とオリゼメート防除を徹底し、発生が確認された場合は直ちに治療剤(ブラシン等)を散布し各営農センターにお知らせください。